

## 書評

# 『鄧小平と中国の変革』を読む

范 力

Bookreview, Deng Xiaoping and the Transformation of China

FAN Li

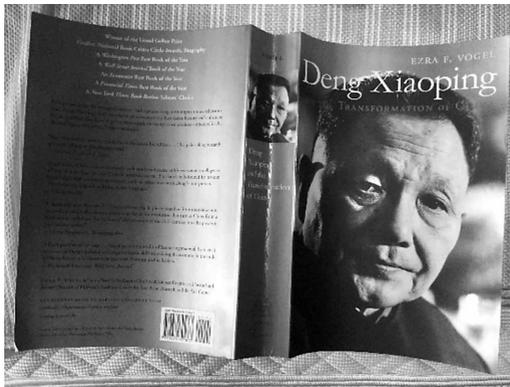
### 1、エズラ・F・ヴォーゲル『鄧小平と中国の変革』

今日の日中関係は「けん制し合い」という側面があるように思う。例えば、中国は自身が台頭してきたため尊重してもらいたい。しかし、日本はそれを素直に認めようとしなと感じる。それだけでなく、日本は中国の「強引な」海洋進出を「口実」に新たな安保法案を通過し、日米軍事同盟を強化し、フィリピンやベトナムと組んで、中国を抑えようとしているように見える。

それと同時に、日中両国民の好感度が下がり続け、共に10%前後に推移している。したがって、両国間で「戦略的互惠関係」の構築どころか、かつて暖かかった経済関係も水を差したように後退しているという動きも出ているほど冷めているのである。また、このたび、国連ユネスコの南京大虐殺記憶登録をめぐる日中のあつれきにしても、インドネシアの高速鉄道をめぐる日中の熾烈な競争にしても、日中関係の現状はけん制し合いという特徴が強いように思われる。

## 范 力

そういうなかで、一般的に言うと、中国人の意見は中国に傾く向きがあるのに対して、日本人の考えは日本に偏る傾向がある。そこで、第三者の意見を聞くべきだという考えがある。私はその第三者というものが米国なのかそれともロシアなのか、つまり国によって考えはずいぶん異なると思う。したがって、第三者だからと言っていわゆる中立的立場に立てるとは限らない。とは言え、第3国なので、比較的客観的にものを見ることができよう。これにふさわしい人物の一人はアメリカ人エズラ・F・ヴォーゲル氏である。



エズラ氏は今から約40年前に『Japan As No.1』というタイトルの著書を出版した（Japan as Number One : Lessons for America, Harvard University Press, 1979. 広中和歌子、木本彰子訳『ジャパン アズ ナンバーワン：アメリカへの教訓』TBSブリタニカ、1979年）ため、日本ではよく知られる人物である。

一方、ここ50年間をかけて、エズラ氏は中国など東アジアのことも研究し、専門書を数冊も出版している（One Step Ahead in China : Guangdong under Reform, Harvard University Press, 1990. 中嶋嶺雄訳『中国の実験——改革下の広東』日本経済新聞社、1991年；The Four

Little Dragons: The Spread Of Industrialization In East Asia, Harvard University Press, 1993. 渡辺利夫訳『アジア四小龍（いかにして今日を築いたか）』中公新書、1993年などを参照されたい。

このたび、エズラ氏の中国研究の集大成とも言うべき著書に出会った。Ezra F Vogel, Deng Xiaoping and the Transformation of China (The Belknap Press of Harvard University Press, 2011, エズラ・F・ヴォーゲル著・益尾知佐子・杉本孝訳『現代中国の父 鄧小平』上下、日本経済新聞出版社、2013年)である。

日本語版は出版当時から読んでいたが、英語版を読むのは初めてであった。なお、中国語版も発行されている(繁・簡体字版傅高義著、馮克利訳『鄧小平時代』香港中文大学出版社、2012年;簡体字版同『鄧小平時代』生活・読書・新知三聯書店、2013年を参照されたい。また、本文はこの本のタイトルを『鄧小平と中国の変革』にする)。ちなみに、この本は中国でもベストセラーとなり、大きな話題になっている。

以下は、エズラ氏の著書のあらすじを整理したい。

## 2、『鄧小平と中国の変革』のあらすじ

本書は6部24章から構成される。

第1部は、鄧小平は「革命家から建設者へ、そして改革者へ」という鄧小平の生い立ちを整理し、1904年に生まれから1969年までの経歴を述べる。

第2部は「追放と復活」と翻弄されながらも、鄧小平は力強く不遇を乗り越え、「毛沢東の下での秩序回復」、「毛沢東の下での前進」、そして「毛沢東時代の終焉を傍観」しながらも、「華国鋒の下」での再び復活を果たしたことを経て、「最高指導者をのぼりつめた道」を述べる。

第3部は「谷牧の西欧視察」、「1978年の三中総会などの転換点」、「民主の壁の取り締まり」と「四つの基本原則」の設定、ソ連・ベトナムの「脅威」と「中越戦争」、「訪日と日本への門戸開放」、「訪米とアメリカへの門戸開放」、「毛沢東時代との決別」、「政権の船出」といった史実などからな

范　　力

り、「鄧小平時代の始まり」を述べる。

第4部は鄧小平の「統治技術」を皮切りに、広東と福建の「経済特区」の実践、経済調整と農村改革、「郷鎮企業」、経済発展と対外開放の加速、中ソ改革の比較、一国二制度——台湾（台湾との統一への努力）、香港（主権回復）、チベット（亡命政府との接触）、中国軍隊現代化への努力、学生運動と胡耀邦の失脚、精神汚染とブルジョア自由化反対などから、「鄧小平時代」を述べる。

第5部は「北京の春」、「ゴルバチョフの訪中」、中国指導部の「分裂」（趙紫陽と李鵬の確執）、「戒厳令布告と民衆弾圧」、「天安門の悲劇」、「江沢民への権力移譲」、東欧・ソ連の社会主義体制の「崩壊」、「愛国主義教育」の実施、逆風の中で、有終の美——「南巡講話」などからなり、鄧小平時代への「挑戦」を述べる。

ちなみに、第3部から第5部までは本書の最重要部分だと思われる。

第6部は結論に当たる部分で、中国の変革を通して鄧小平の歴史的位置づけを述べる。

### 3、鄧小平は中国会社の総経理だ

以上はエズラ氏の著書を簡単でありながら整理した。続いて、著書を読んだ感想などをいくつか述べておこう。

まず、著書は広く読まれること。繰り返すが、『鄧小平と中国の変革』は中国語簡体版と繁体版が発行され、中国でも広く読まれており、ベストセラーとなったのだ。恐縮だが、私はかつて伊藤正氏が書いた『鄧小平秘録』を中国語に翻訳した（『晩年鄧小平』香港新東方出版、2009年を参照されたい）。この『鄧小平秘録』は日本の読者を対象に書かれた書物で、2008年に日本でやはりベストセラーとなった（2009年日本記者クラブ賞）。『鄧小平と中国の変革』はアメリカの読者を対象に書かれたもので、本国読者が対象ということは前掲伊藤著書と同様である。

しかし、『鄧小平秘録』は出版されてから、中国当局に「禁書」と指定

されたようで、中国大陸で簡体字版の出版どころか、ようやく香港で出た繁体字版もやはり禁書とみなされ、ネット上にある関係する情報もほぼきれいに削除され続けているのである。寂しい限りだ。一方、エズラ氏の著書は中国では大変好評で何十万部も売れているという。なぜこのような差が出たのか不思議でならない。

次に、『鄧小平と中国の変革』は「中国人みたいな外国人が書いた本」で、『鄧小平秘録』は外国人が書いた本だったと言われている。確かに、中国共産党はネット上にある不利な情報を常に削除している。言論統治である。また『鄧小平秘録』に「天安門事件」つまり中国指導部にとって都合の悪いことが大いに暴露されたため、禁書にされたと考えられる。

また、代表的な日本人の中国専門家の間で、中国で資料を探すのにかなり苦勞をするという話もよく耳にする。したがって、中国は学者にとって「地獄」だと言う日本人学者もいる。

しかし、エズラ氏も立派な外国人である。また天安門事件のことも避けて通らず、書かれており、穏やかでありながら、分析も行われ、批判もあった（英語版PP595-640、日本語版320~349ページ、中国語繁体字版551~570ページ、香港簡体字版541~560ページ、中国簡体字版565~594ページ。以下同じ）。また『鄧小平と中国の変革』の前書きを読めばわかるように、エズラ氏はこの本を書くのに百以上の中国人をインタビューしていたという。つまり、中国人の協力者が大勢いた。評者からすれば、エズラ氏は資料を収集するために、中国に何回も足を運んで、訪中はエズラ氏にとって「地獄に落ちる」のではなく、「如魚得水」（うおのみずをえたるがごとし、つまり水を得た魚のように、自分がかねて考えていた理想の人に会う、またふさわしい環境を得て、思うようにはつらつと活躍すること）であったように思う。

一方、『鄧小平秘録』のまとめにも多くの中国人の協力者がいたはずだったが、名前でさえ出ていない。お礼として協力者に本を贈るのに、著者は大変苦勞したことは想像し難くない。エズラ氏は著書のなかで鄧小平の統

治手法を「技術者」として持ち上げたが、評者もこの言い方を使って、エズラ氏の書き方を「技術者」と評価したい。

その次に、鄧小平がいなければ今日の中国はなかったとエズラ氏の著書を読んで再確認することができた。

深圳をはじめ珠海、汕頭、厦門（アモイ）などの広東・福建にある経済特区の設立（海南島は1988年に広東省から初めて切り離され省として設置され、中国最大の経済特区となった）、また中国の東南沿海地域にある大連、秦皇島、天津、煙台、青島、連雲港、南通、上海、寧波、温州、福州、広州、湛江、北海の14都市の対外開放、アメリカや日本、そしてソ連などの国々との実質上の関係正常化、一国二制度のもとでの香港の回収、さらに南巡講話、社会主義市場経済の導入などほぼすべてが鄧小平指導の下で、あるいは鄧小平本人自らがやり遂げた業績であった。

評者にとって注目すべきは外国との比較、特に日本やソ連との比較というところだった。まず、日本との比較について。著者は改革開放初期の谷牧視察団と日本の岩倉具視使節団と比較した手法は評者になかった考えであって刺激を受けた。また、日中二つの使節団のそれぞれの国の対外開放に大きな役割を果たしたと肯定したうえで、その違いを「時間がよりゆったりしていた明治維新の日本では、岩倉使節団が訪問の概要をまとめるだけで五年かかった。対照的に、谷牧が視察から帰国して一行が報告書を取りまとめ、中国の経済指導者が一行の学んだことの意味合いを議論するための適切な組織を立ち上げるまで、わずか数週間しか費やされなかった」と指摘している（英語版P224；日本語版下巻342ページ；中国語繁体字版195ページ；中国語簡体版191ページ、226ページ）。

また、中国の改革と前ソ連の改革との比較も面白い。1980年代、ソ連も中国も社会主義国として改革に敢行した。ところが、改革の結果は全く異なった。つまり、ソ連は失敗に終わり、ロシアに変わったが、中国は成功したのだ。中ソ改革の異なった結果をもたらした原因はいったい何だったのか、興味深い課題である。

これまで、香港やマカオ、台湾に接すること、華僑の故郷（汕頭）、中国政府の強力なリーダーシップ、中国人の貯金好き、そして国有企業で働いた人の割合の低さなどが中国の特徴として取り上げられ、ソ連に比べると、計画経済から市場経済へと移行するのに比較的しやすかった点だという研究もなされているが、エズラ氏は、「ソ連と比較して、中国には有利な点が多かった」として、中国は長い海岸線を有し、「それはより安い海上輸送を可能にし、また、輸送規模の拡大も陸上輸送よりはるかに容易だった」とし、そしてなによりも、「中国大陸の巨大の潜在市場に引き付けられた世界中の実業家たちが、中国へ支援の手を差し伸べた。それが結果的に10億人の巨大な顧客獲得につながるかもしれなかったからである。一部では、政治的な思惑も同様に作用した。1978年に中国が対外開放に踏み切ると、欧米諸国は何とかして中国をソ連から引き離そうとした。資本や技術を惜しみなく移転し、中国の留学生や訪問団を大いに歓迎した」と指摘した（英語版PP473-476、日本語版下巻127～131ページ、中国語繁体字版433～435ページ、簡体字版422～425ページ、459～462ページ）。

また、地理的条件や民族の同質性も、中国の成功に重要な役割を果たしたとし、「集団で経営していた水田を個々の農家に分与することで、農民の生産意欲を高めて農業生産を拡大するやり方は、ソ連ではまねができなかった。広大な乾燥した大地を耕すためには、大型トラクターの方が向いていたからである。また、人口の93%を同じ民族が占めている中国は、人口の半数以上がさまざまな少数民族からなっているソ連よりも、一つの国としてまとめやすかった。ソ連がその版図を広大な領域に拡大したのはようやく前世紀のことであり、それはソ連の権威に積極的、あるいは消極的に抵抗する少数民族を併合することで成し遂げられてきた。これに反して、中国は2000年以上にわたってその領域の大半を治めてきたのであって、中国の支配に抵抗する他国を占領するような、過度な拡大を重ねてきたわけではなかった」と分析した。

また、「中国の指導者たちは自国が文明の中心だとする長い歴史に由来

する自負を抱いてきたが、ソ連の指導者たちは昔から自国が西欧諸国の後塵を拝しているという事実気付いていた。そして最後に、中国の隣人であり、共通の文化圏である日本、韓国、台湾、香港、シンガポールが豊かな現代国家に発展したことも、中国にとって絶好のモデルとなった」と比較し（同上）、なるほどと思った。

なお、評者を含む中国人の読者にとって世界銀行などが中国の近代化に大きな役割を果たしたという指摘も思い知らされた点であった（英語版PP455-464；日本語版下102～114ページ；中国語繁体字版418～425ページ；簡体字版407～415ページ、443～451ページ）。唯一、郷鎮企業は農民自身の創造だったが、農民たちの行動を容認したのはやはり改革開放政策か万里など鄧小平の側近と言われた改革者のおかげであった。

以上述べたことをなくして今日の中国は語れない。したがって、鄧小平はいまの中国を形作ったと言って良い。

では、なぜ鄧小平は実権を握ってから十数年の間でこれだけのことをやり遂げられたのか。繰り返すが、『鄧小平と中国の変革』はその原因を「鄧小平の統治技術」にあると持ち上げている。いわく「個人崇拜や堂々とした肩書を持たないにもかかわらず、鄧は単に党の副主席、国務院の副総理、それに中央軍事委員会の主席という地位だけで、権力を効果的に操ることができた。彼は、自らへの評価を最大限に活用し、強くて繁栄した国家を築く能力のある安定した制度をつくろうと、大胆に行動したのだった」という。

また、「毛沢東が歴史書や小説を読み、布告を発する雲上の皇帝のような存在であったとしたら、鄧は自らの戦闘計画が適切な人員配置の下に実行されるよう、注意深く点検を怠らない司令官により近かった」としている（英語版P377；日本語版上巻552ページ；中国語繁体字版329ページ；簡体字版321ページ、371ページ）。納得のいくコメントだったと思う。エズラ氏は、よく言われている鄧小平は改革開放の「総設計師」ではなく、中国という株式会社の「社長」（総経理）だと断言した（傅高義「小平是

総経理、不是総設計師』、『南方週末』2012年4月1日。また、エズラ氏は鄧小平を「改革開放の総指揮」だと位置づけている。『鄧小平時代』韓国出版、香港『文匯網』2014年1月23日)。評者にとって、これは鄧小平研究の新たな見解であり、東亜研究の泰斗に相応しい「結論」だったと感銘を受けた。

もちろん、鄧小平にとって努力はしたが、実らなかったことも数多くあった。そのうちの一つはチベット問題である。チベットについて、大きな問題として取り上げられがちだが、鄧小平時代の中国政府側はチベット亡命政府との間でよく話し合われたことは以前から知っているが、双方の意見が大きく食い違った関係で最終的に話がまとまらなかったことはとても残念だが、そうしたことの経緯について著書に簡潔に整理され、説得力のある内容となり、評者にとってもとても勉強になった部分であった(英語版PP511-522; 日本語版178~195ページ; 中国語繁体字版465~474ページ; 簡体字版454~463ページ、494~504ページ)。

ちなみに、ダライラマ十四世の兄は2015年にメモリー (Gyalo Thondup, Anne F Thurston, *The Noodle Maker of Kalimpong: The Untold Story of My Struggle for Tibet*, Public Affairs, 2015) を出版し、これまでアメリカとの間でのやり取りを記し、そのむなしさをつぶさに述べている。あわせて参照されたい。

台湾問題もそうである。1980年代において、鄧小平は中台統一を目指し、シンガポールの建国の父・リー・クアンユーを託し、台湾総統蔣経国(当時)と面会する用意があるというメッセージを伝えたが、しかしかつて一緒にロシア留学した蔣経国に拒否されたと著書に書かれている(「蔣経国『我拒見鄧小平的真正原因』」、『多維新聞』2015年11月8日をも参照されたい)という。その後、天安門事件の影響もあって、台湾との統一は結局、成功していないことはすでに周知の通りである。

また、エズラ氏の著書は香港や台湾とチベットと比較することで3者の異同がはっきりさせ、読者にとってすごく理解しやすかった。

#### 4、人間鄧小平

鄧小平は人間である以上、ミスや誤ちも少なからず犯してしまった。この点について中越戦争、鄧小平の人格、華国鋒、胡耀邦や趙紫陽の使い捨て、そして天安門事件に分けて考えたい。

いわゆる先進諸国のインテリは中国を研究した際、批判的精神を重んじるのは常である。たとえば、1979年の中越戦争についてもそうだ。少なくともインテリの間は批判する精神をもった傾向が強いように思う。しかしエズラ氏は異なった。エズラ氏は鄧小平の行動を「理解」し、ベトナムは当時の中国にとっては「脅威」とした上で中越戦争のことを述べている。また、中越戦争を通して、世界大戦は起きる可能性が低いと鄧小平は確信し、そして、「それを機に経済建設に全力を注ぐ決意をした」と述べた部分はとてもユニークだった（英語版PP266-293、日本語版上巻400～438ページ、中国語繁体字版231～254ページ、簡体字版225～248ページ、264～290ページを参照されたい）。

しかしこのような書き方は、中越戦争を肯定するのではないかとみられても仕方がない。中越戦争は中越関係に残した傷跡、特に中国人も含む多くの人が死亡し、怪我したことに触れようとしなかったことは物足りなかったと言わざるを得ない。事実、あの戦争の被害者は苦しい生活におかれているのはいまだに現状であるから。

また、エズラ氏は鄧小平と中国の変革に重点を置いて本を書いたことは十分に承知しているが、やはり鄧小平の人格について、今日の中国でも意見が分かれたように「欠けた」部分があったのではないかと思う。

毛沢東無き直後の中国、後継者の華国鋒が中国のトップであって、鄧小平は失脚した状態におかれていた。つまり華国鋒の許可がなければ、後の鄧小平の復活はあり得なかった。これは常識である。しかし、話が飛ぶが、後に華国鋒は鄧小平により権力の中心から追放されていった。確かに、華国鋒は「二つのすべて」（毛沢東の死後、権力を受け継いだ華国鋒が提唱した政治標語であり、「すべての毛主席の決定は断固守らねばならず、す

べての毛主席の指示には忠実に従わなければならない」というものである)に問題があった。しかし、鄧小平自身も後に「四つの基本原則」(社会主義の道を堅持し、人民民主主義独裁を堅持し、中国共産党の指導を堅持し、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を堅持する)を提唱したのであった。つまり鄧小平は自己矛盾に陥っていたのであった。

換言すると、鄧小平自身も華国鋒と同様、毛沢東を十二分に利用したのだ。したがって「毛沢東思想を堅持し、毛の決定を守り、その指示に従う」華国鋒を権力の座から追放したというやり方はフェアではなかった。

また、毛沢東時代も華国鋒がトップだった時も、復活を果たすために、鄧小平は自ら犯したミスや過ちを認めたのであった。しかし、一旦権力の座につくと、鄧小平は約束を平気に破るのだ。中国を変える強い精神、そして中国の国民生活を豊かに導いた結果は評価されなければならないが、「出爾反爾」つまり自分の言葉に背く、言うことがくるくる変るということから、鄧小平の人格はやはり欠けた部分があったのではないかと思われる。生涯で3回も失脚し、そして3回も復活を果たした鄧小平はやはり尋常ではなかった。しかしエズラ氏の著書は、鄧小平と異なった華国鋒の長所を評価したものの(施浜海「傅高義『鄧小平時代』的硬傷、『炎黄春秋』2013年8月18日を参照されたい)、鄧小平への批判は控えた。

胡耀邦や趙紫陽への使い捨にも言及したい。一般論として、胡耀邦も趙紫陽も1980年代の中国の代表的な改革派だった。2人は実績があり、それぞれ後に中国共産党のトップ(中国共産党主席か総書記)の座についた人物であり、趙は総理も務めていた。80年代の改革開放を語った際、この2人は欠かせない。しかし後に、2人はともに学生運動に強い態度を示せなかったという責任が問われ、解任か軟禁されていく。一方、鄧小平自身の任命責任は問われなかった。「為政者不善」という中国の言い伝え、つまり「政治をなすものは善人ではない」という伝統が続いていたとでもいふべきであろうか。仮に、これは「一部の役人を犠牲にしたが、改革開放政策は救われた」とまで言われれば(英語版P419; 日本語版下50ページ;

中国語繁体字版365ページ;簡体字版354ページ、409ページ)、そこまでだが、改革開放時代に入ってから毛沢東時代とあまり変わらない中国の「政治生態環境」が生きていたと言わざるを得ない。死に追い詰められてしまった胡耀邦あるいは死ぬまで軟禁状態におかれた趙紫陽の例を見てみると、中国政治の残酷さを如実に物語っていると思う。

最後に天安門事件と鄧小平との関係について触れたい。

現代中国に1976年と1989年の2回の天安門事件があり、共に鄧小平と密接な関係があった。1回目の1976年の天安門事件は周恩来の死去をきっかけに「毛沢東批判、鄧小平擁護」という意味が込められたのに対して、2回目の1989年の天安門事件は「鄧小平批判」という側面もあった。残念ながら、2回の天安門事件はともに失敗に終わっている。常に言われる「人民が歴史をつくるのではなく、英雄が歴史をつくる」という物語であった。後に中国政府は1回目の天安門事件を名誉回復したが、2回目の天安門事件は否定されたままである。

一方、ソ連の崩壊・東欧諸国の革命とは対照的に、中国は体制維持できたのみでなく、目覚ましい経済発展を遂げて、世界2位の経済大国へと変身しているのも明白な事実である。そのため、天安門事件のマイナス影響は薄れつつあるが、天安門事件を機に中国の人権問題が注目されるようになったことに変わりはない。

エズラ氏は天安門事件のことに当然ながら触れている。しかし、天安門事件を「鄧小平時代の挑戦」という章に入れ、「ソ連崩壊」「東欧革命」と「南巡講話」と並んで淡々と述べていて、伊藤正氏の著書『鄧小平秘録』との差をはっきりとつけたのである。つまり後者は天安門事件を全書6部のうちの第1部として大々的に鼓吹・宣伝するのに対して(伊藤正前掲書上巻、14～126ページ)、前者は最終章の一部として軽く述べるのみにとどまった(英語版PP595-663;日本語版下巻290～382ページ;中国語繁体字版533～591ページ;簡体字版523～560ページ、565～594ページ)。エズラ氏著書と伊藤氏著書は今日の米中関係、そして日中関係の全体像を反映

書評 『鄧小平と中国の変革』を読む

できないが、少なくとも、日米のインテリが同じく鄧小平時代の中国を研究した際、その相違点を垣間見ることができたのではないかと考えている。

○校正するにあたり、今年度のゼミ生に協力してもらった。感謝の意を表する（2016年2月19日）。

EZRA F.VOGEL, Deng Xiaoping and the Transformation of China, The Belknap Press of Harvard University Press, 2011.

エズラ・F・ヴォーゲル著、益尾知佐子・杉本孝訳『現代中国の父 鄧小平』  
上下、日本経済新聞出版社、2013年

傅高義著、馮克利訳『鄧小平時代』香港中文大学出版社、2012年（繁体字版・簡体字版）；同『鄧小平時代』生活・読書・新知三聯書店、2013年（簡体字版）

（本学経営学部教授）